

快挙！

愛知淑徳学園理事長・学園長
小林素文



大正12年当時の水泳部



祝賀会で挨拶をする主将の中野さん、右は顧問の八神先生

愛知淑徳の運動クラブが久しぶりに快挙をとげました。『第52回全国中学校水泳競技大会』で見事総合優勝を飾ったのです。

愛知淑徳水泳部は4人のオリンピック選手を輩出するなど、輝かしい伝統があります。が、それは「朝夕に生まれたものではありません。愛知淑徳学園史によると「水泳部は大正11年の夏休みに、知多郡鬼崎村で水泳練習が一週間行われたのが始まりである」とあり、初めて淑徳生を水泳競技に参加させる時の悩みを、創立者小林清作先生は次のように述べています。「困ったのは、女子の競泳の如きは、当地方にはまだ余り例を見ざりしこととて、生徒の家庭の諒解を得るに困難であったことである。…(練習は海岸の)大野まで出掛けねば成らぬ。之につけても名古屋市内にプールが欲しいものである」

清作先生が望んだ名古屋市内のプールが昭和2年に、その2年後に淑徳に自前のプールが出来る。昭和4年から7年の間に、全国大会で種目別優勝31回と、愛知淑徳水泳部は破竹の勢いでその名声を高めていきました。

こうした素晴らしい活躍は戦争により中断しますが、選手たちを鍛えたプールが校舎を守ります。空襲の火の手が淑徳の校舎におよぶと、淑徳に寄宿していた陸軍航空整備学校の少年兵200名がプールの水で懸命に消火活動をし、校舎を守ったのです。そのお陰で淑徳は戦後いち早く教育活動を再開することが出来ました。

戦後、水泳部はその防火用水となっていたプールで泳ぎ始めます。その時の印象をOGは次のように述べています。「プールにはひきがえるやら、青い蛙の可愛いのもいました。…うっかりターンでもしようものなら、目の前にイボがえると鉢合わせという様なことだって、…そんな時、『キヤー』なんて声はだせません。出したら大変、『神聖なプールで奇声を発するとは何事です』と言う事で、先生にあやまり、上級生にあやまりで、簡単に『キヤー』ではすまされなかつたのです。」

さすがに、プールを修理してもらいたいと、水泳部の募金活動が始まり、生徒会もこれに協力し毎月の積み立てを始めました、PTAや同窓会もこれに加わ

り、相当な積立金ができ、学園もその熱意に動かされ、昭和25年待望のプールが新しく完成しました。その後の水泳部の活躍はめざましく、全国大会で優勝を重ね、4人のオリンピック選手を輩出しました。

*

7年前に中高一貫教育となった愛知淑徳中学高等学校が、進学校としての実績を上げていく中で今回の水泳部の快挙は、文武両道の愛知淑徳の伝統が堅持されていることを示し、誠にうれしく存じます。

創立者小林清作先生は「美人觀の革命」と題し、次のように述べています。「深窓の佳人式のもの、もう美人ではない。これからの美人は顔に壮健の色が漲り、均斉に発達したる肢体を有するものでなければならぬ。運動で鍛え上げたる、生き生きしたる美人が持囃されてこそ、我が日本に興国の気象ありと云ふべけれ」

これからも、愛知淑徳は伝統を大切に、10年先20年先を見据え、様々な教育活動を展開し、生き生きとした人材を育ててまいりたいと存じます。